

離島の漁業に生きがいを求めて
—知夫里島定住報告—

知夫村漁業協同組合
加藤 二士

1. 地域の概況

私が現在住んでいる知夫里島は日本海の沖合約50kmに位置しており（図-1）、所属する知夫村漁業協同組合は350人の漁業者（正組合員103人・準組合員247人）で構成され、一本釣り・採介藻・刺網・養殖漁業が営まれている。

平成6年の村の水揚げは130トン、1億3千万円であった。

2. 定住に至った契機

私は神奈川県三崎水産高等学校の専攻科を卒業後、外航船の航海士をしていたが、海運不況で混乗船化が進行した事、また2人目の子供が出来たのをきっかけに船を降りる事を決意し、岡山の水島コンビナートにある大手鉄鋼会社のフォアマン（荷役監督）として働いていた。

その頃、私ども家族は休日になると車で郊外に出かけることを楽しみにしており、「どこか田舎の方で暮らせたらいいな…」と話し合っていた。

そんな折に、「島に住みませんか 牛や漁船をあげます」という新聞記事を見付け、早速知夫村役場に問い合わせ定住に応募する事にした。

当然のことながら、これまでの安定した職業を辞めて、家族4人で見ず知らずの土地へ行くことに対して、私の両親からは猛烈な反対を受けた。確かに、私自身も移住した後の生活や収入については不安もあったが、この様な機会は滅多に有るわけではなく「何としても田舎で漁業をしながら暮らしたい」という強い意向を話し、ようやく両親の理解を得ることが出来た。

3. 定住する過程

平成4年8月に応募が締め切られてから、9月に書類審査と面接（大阪又は知夫村にて）が受けた。そして、漁業技術の習得について知夫村漁協の協力により、10月中旬に現地



図-1 知夫里島の位置図

研修という形で白イカ釣り・レンコ鯛釣り・カナギ漁の体験ができ、この様な過程を経て最終決定を受けたのが10月末であった。(図-2)

漁船の取得については知夫村から全面的な助成があり、購入価格5百万円以下の船を10年間は無償貸与、それ以降は払下げという内容であった。私の場合は1トンのカナギ船と船外機船の2隻を取得した。

また、住宅の問題についても知夫村からの斡旋により、改修費3百万円を上限として整備する空家か県営住宅を選択出来るため、私は県営住宅を希望して入居した。

最初は、誰もが知らない人ばかりであったので、しばらくの間は私達家族全員が戸惑いを感じていた。しかし、私も漁に出るかたわらで知夫村活性化協議会の一員として、村のイベントである「島びらき」等の企画・運営に地域の方々と一緒に取り組んだ事、妻が商工会に勤めるようになった事、地区の方々に野菜を頂いたり、私もお礼に魚を持って行ったりした事など、仕事や生活の中で自然に村の人々との交流を深める事が出来た。この様な人とのつながりは自分で田舎に住んでみて初めて実感したが、知夫里島の素晴らしい一面だと思っている。

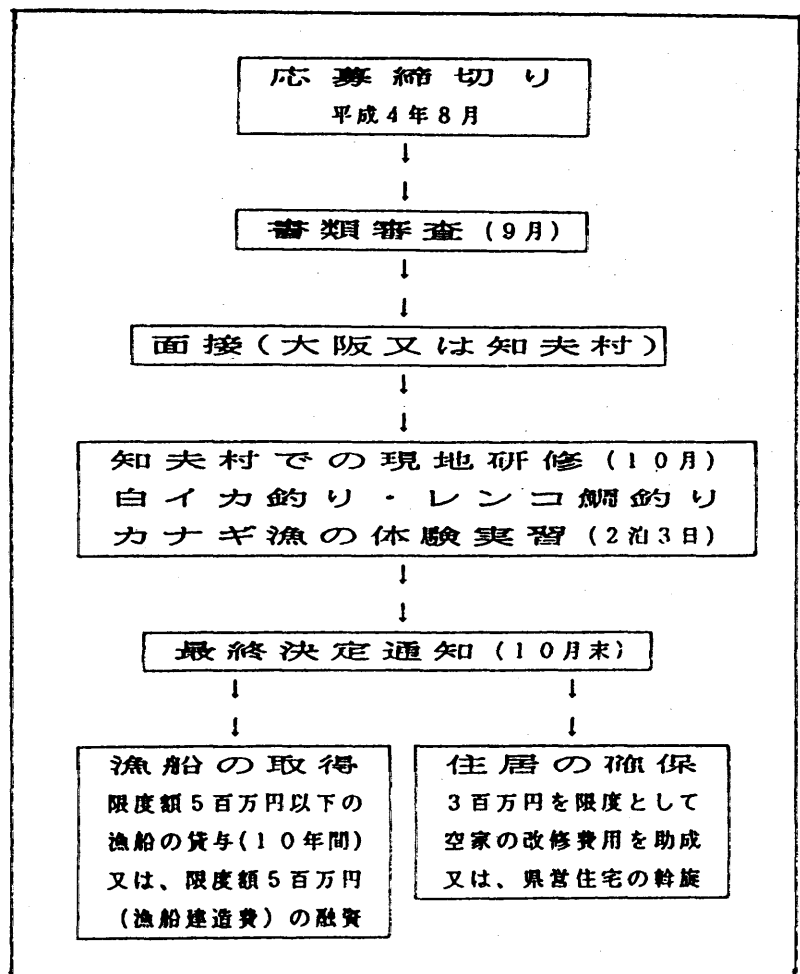


図-2 定住への過程

4. 実践活動

【最初の出漁】

初めて出漁したときには、村から借り受ける漁船が建造中であったため、当時定住事業を担当していた役場職員の方から船を借り、漁港内でカナギ漁で使用する權を漕ぐ練習をした。權の扱いがなかなか会得できず、数時間は船が思うように動かない状態が続いたが、少し慣れた頃を見計らって外海へカナギ漁に出た。初日の成果はサザエが8個だったのを今でも覚えているが、その当時に周囲の人々から心配されたのも当然の事であった。

【年間の操業状況】

私の場合は天候が許す限り出漁するように心掛けているので、年間の操業日数は知夫村へ来てからの3年間では余り差が見られない。ちなみに平成6年では1月から3月の間は

海況により1か月の出漁日数も12日から27日と大きく変化するが、4月以降は平均18日前後に落ち着き、年間約230日は漁に出ている。(図-3)

漁業種類としてはカナギ漁を中心に年間の操業を組み立てるが、(表-1)4月から6月の間は海が暫しば濁ったり、サザエの禁漁期間に当る為、一本釣り(沖メバル・レンコ鯛・アマ鯛・水カレイ)も取り入れている。同様に10月と11月もアワビが禁漁である為、サザエのカナギ漁にマダイや白イカ釣りを組み合わせるが、釣による漁獲は変動が大きく、これらの時期は安定した収入が得難いと言える。

そこで、昨年からカナギ漁の停滞期に出荷や籠換え等の作業が出来るイタヤガイの養殖試験を実施した。

稚貝は県栽培漁業センターの人工種苗4千個を購入したが、今のところ成長・歩留りも良く、作業的にもカナギ漁と両立出来る感触を得ている。

そのため、本年度はカナギ漁の補填が出来る程度の養殖を計画し、天然種苗も併せて1万枚以上の飼育体制を目指して、天然稚貝の採苗も実施した。

また、この他に去年の夏にはイワガキの天然採苗試験にも挑戦した。イタヤガイ等に較べてイワガキ養殖の場合にはパールネットや育成中の貝殻掃除が不要であるので、安定した採苗が可能になれば、経費と手間を掛けずに漁業収益を伸ばせると期待している。そのために、来年以降もこの試験を継続して採苗器の投入時期及び設置場所を検討したいと考えている。

【カナギ漁】

通常、カナギ漁では主機のクラッチを足で操作して船を前後に移動させ、櫂で左右の運動を調整しながら漁をするが、風や潮流等の外力に対していかに船を安定させるかがこの漁法の最も難しい部分であり、かつ水揚げの良否を決定する要素と言える。

まず、平成5年4月に電動スラスターを導入したところ、車を運転するのに近い感覚で操船できるようになり、櫂を使わないので体力的な疲労が少なくなると共に、以前より長時間の操業が可能となった。

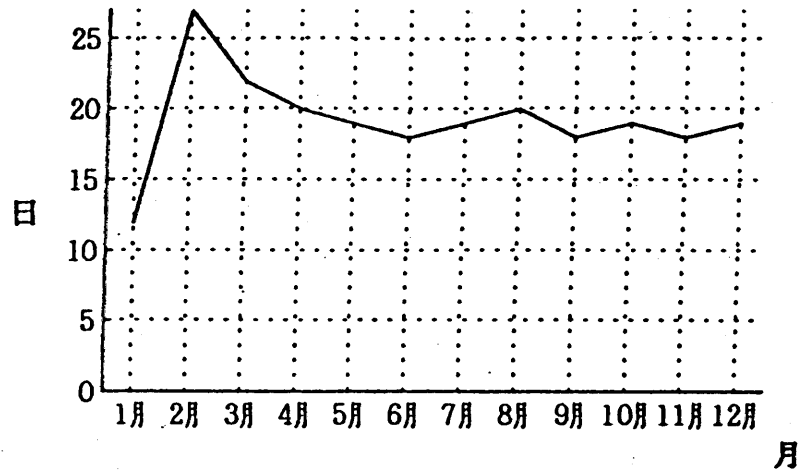


図-3 年間の操業日数

表-1 年間の主な操業内容

時 期	操 業 内 容
1 月～3 月	カナギ漁 (サザエ・アワビ・ナマコ)
4 月	カナギ漁又は沖メバル釣り(海況により)
5 月～6 月	一本釣り(連子鯛・アマ鯛・水カレイ等)
7 月～9 月	カナギ漁 (サザエ・アワビ)
10月～11月	カナギ漁 (サザエ)
12月	カナギ漁 (サザエ・アワビ・ナマコ)

しかし、電動スラスタはバッテリーが不足すると強風時に力不足を感じたり、電氣的な機器である為塩に弱く故障が頻発するという欠点が目立った。

そこで、平成7年4月に油圧スラスタを導入したところ、電動のものに較べて3倍のプロペラ推力があり、低速域から高速域まで実にスムーズな回転が得られ、より効率的な操業が可能となった。

このスラスタの導入で、權を使用していた頃と比較して1日平均10kg以上の漁獲量を伸ばすと共に(図-4)、結果的に年間の漁獲実績も次第に上げることが可能となった(図-5)。

油圧スラスタ本体の重量が10kg以上と重く、取付作業等に苦勞したり、価格が電動の5倍というデメリットもあるが、スラスタ本体の温度が操業中に50℃位になるので、冬場には冷えた手を温めるのに有効であり、塩に対しても強いため、故障もほとんど無く、安心して使用することができるメリットの方が大きいと考えている。

5. 定住した感想

先に述べたように、私は知夫村へ来るまではサラリーマンであったが、

私ども家族が田舎暮らしをしたいと思ったのは、サラリーマンの生活が合わなかったからだと思う。その当時、自分の上司が皆生きがいの無く辛そうに仕事をしている姿を見ると、自分の将来の姿と重なっている様でとても希望を持って仕事ができなかった。また、残業や夜勤も多く、家族ともすれ違いばかりであり、まるで会社の為の仕事をしているように思えた。

それに較べて、現在は生活に合わせて仕事をする事が出来るので、家族と一緒に過ごす時間も増えた。何よりも、漁業は自分たち家族の為にしていると実感でき、努力や工夫をすれば相応の成果が得られるので非常にやりがいがある。

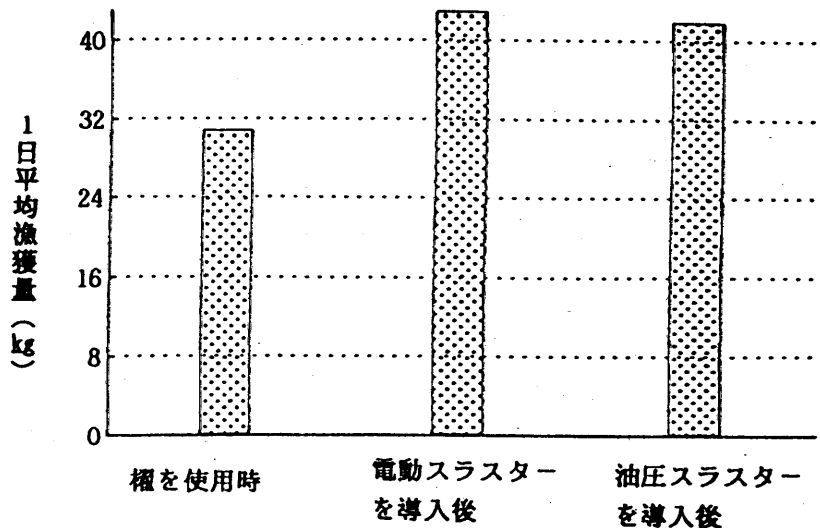


図-4 カナギ漁の1日平均漁獲量の推移

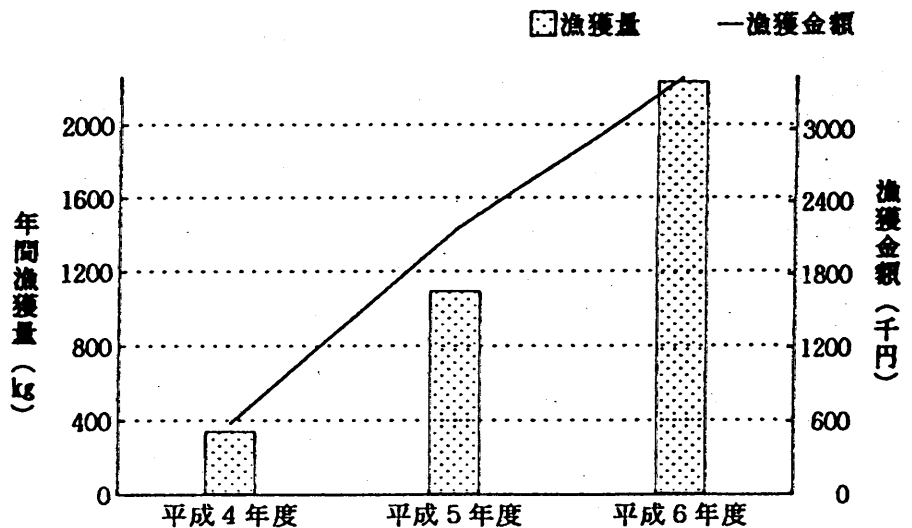


図-5 定住後の漁獲量と漁獲金額の推移

さらに、空気や水がきれいで、車も少なく公害等の心配の無い知夫里島の環境は、子供を育てるのに最高だと考えている。余談ではあるが、いつも自分で採ってきた新鮮な海の幸を着に晩酌が出来るというのは、何にも換え難い贅沢と思っている。

一方で私達のような新規就業者にとって最大の障害は安定した漁業収入を得る事である。農業の場合は新規参入者に対しての研修や助成制度が確立しているが、漁業の場合にはそのような制度が十分ではなく、技術を習得する期間の生活が非常に不安定になるので、着業から一定期間は奨学金のような助成措置があればと思っている。

また、漁業技術を習得するための「参考書」が無く、私の場合も親しい人から教えてもらう程度であったが、より多角的で安定した漁業を実現するためには各地で営まれている養殖も含めた漁業の内容（漁具・設備・作業方法）を編集したテキストがあれば非常に参考になると思う。

6. 今後の希望

漁船漁業だけで現在の漁業生産を飛躍的に伸ばすことは、かなり難しいと思われるので、今後はイタヤガイやイワガキ等の貝類養殖に力を入れて漁船漁業との両立を図り、より効率的な漁業経営を目指していきたいと思っている。したがって、イタヤガイやイワガキの天然採苗を軌道に乗せることが当面の課題と言える。そして、最終的には漁業収入がサラリーマン時代の収入を越えるように頑張っていきたいと思っている。

行く行くは知夫村に自分の家を建て、名実共に知夫里島の住民になることが、私達家族の希望である。